

平成 31 年サワラ春漁の漁況予報

平成 31 年 4 月 11 日

香川県水産試験場

1. 香川県におけるさわら流しさし網（春漁）による漁獲量

漁獲量の推移を図 1 に示します。

平成 18 年から 24 年にかけて年々増加し、24 年から 27 年はおおむね 400～600 トンの範囲で変動しました。しかし、28 年に減少して以降は 300 トン前後で推移しています。

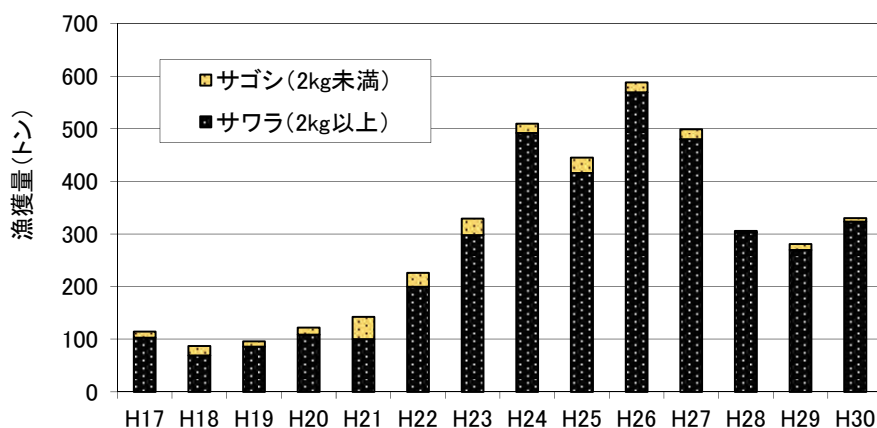


図 1 香川県のさわら流しさし網（春漁）による漁獲量の推移

漁獲成績報告、主要漁協漁獲量報告に基づき、香川県が集計。

2. 0 歳魚資源尾数の推定

各年に発生して育った 0 歳魚の多寡が後年の漁獲量に反映されます。

この 0 歳魚資源尾数については、国立研究開発法人水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所が、毎年度、サワラ瀬戸内海系群の資源評価を行って公表しており、平成 29 年発生群まで示されています。

一方、香川県水産試験場においても、県内海域で 8 月に収集した 0 歳魚の平均サイズや、播磨灘の大型定置網によるキノゴ銘柄の漁獲量等から、平成 30 年発生群までの 0 歳魚資源尾数を推定しています。

漁況予測に用いるデータとしては、瀬戸内海区水産研究所による資源評価を基本としましたが、直近年の推定値は誤差をかなり含むとされています。そこで、平成 28 年発生群までは資源評価による推定値、29 年はこれと香川県水産試験場による推定値の平均、30 年は香川県水産試験場による推定値を用いました。

3. 平成 31 年春漁の漁況予測

0 歳魚資源尾数の推移と春漁における漁獲の関係を図 2 に示します。

左下の図に示すように、瀬戸内海における 0 歳魚資源尾数は、年によって変動が大きいことがわかります。

左上の図に示すように、春漁の漁獲尾数における年齢構成は、2 歳、3 歳が主体ですが、その内容は年によってかなり異なっています。

0歳魚が多ければ、その2年後に2歳魚、3年後に3歳魚、4年後に4歳魚が多めに漁獲され、少なければその逆になるような相関関係があります（赤い矢印で年齢の移行を示しています）。

この関係を使って、平成31年の漁獲尾数における年齢構成を計算したところ、3歳、4歳は近年の平均レベルでしたが、2歳はかなり少ないという結果になりました。29年の0歳魚が少ないことが反映されています。

重量に変換すると、右下の図に示すように、平成31年は230トン程度となり、前年より減少すると予測されました。

なお、以上は、瀬戸内海全体における資源状況が香川県の漁獲に反映された場合の推定です。サワラの回遊が漁場環境や餌生物の分布等によって例年と大きく異なった場合や出漁隻日数が大幅に増減した場合には、予測と異なる漁獲量になることもあり得ます。

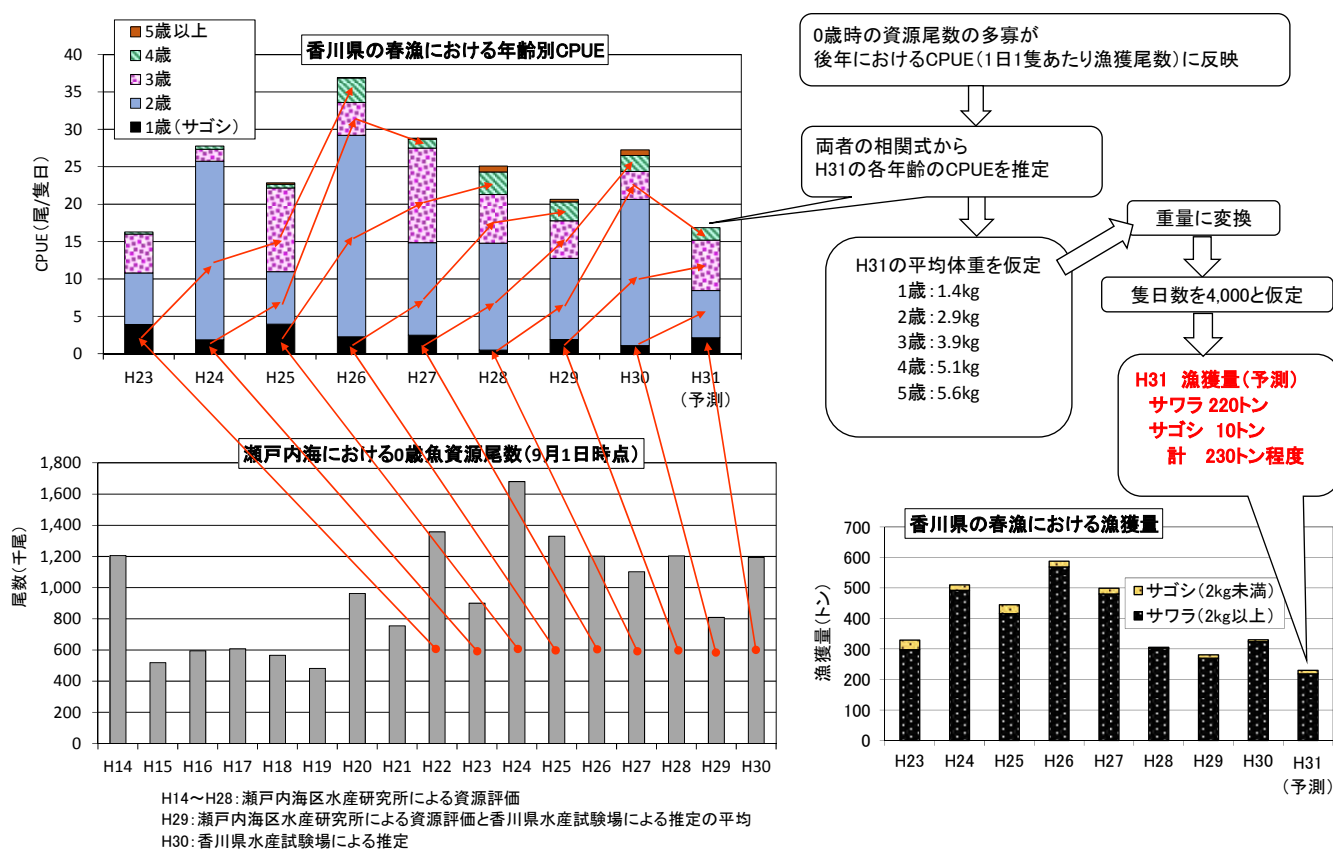


図2 0歳魚資源尾数の推移と春漁における漁獲の関係

平成30年度サワラ瀬戸内海系群の資源評価では、水準は低位、動向は横ばいとされています。本格的な資源回復の指標として、高齢魚の増加、魚体の小型化が提示されており、現状以上の資源管理措置を実施しながら、できるだけ大型魚を狙って漁獲することが望ましいとの見解が出されています。現状の資源管理の取組みを緩めることなく、今後とも継続することが必要です。